男女共同参画社会を目指して
ハーモニー広場
harmony hiroba
2012 Vol. 61

それぞれの
＼男女共同参画／
チャレンジストーリー

「チャレンジストーリー」では、個人・団体・企業の
皆さんのチャレンジをご紹介します。
起業、地域活動、働きやすい環境づくりなど
さまざまな分野で広がる男女共同参画社会。
それぞれの活動を参考に、皆さんも
新しいチャレンジを始めてみてください。

Challenge! story 1
個人の取り組み 紹介

Challenge! 1

女性の視点から、企業ブランディング

根本登茂子さん　(有)ミズプラン代表取締役・広告&出版プロデューサー
(社)日本パーソナルカラリスト協会色彩診断士

根本登茂子さんは、広告・自費出版をサポートする企画広告会社ミズプランの代表取締役です。広告代理店勤務の後、平成5年に水戸市にミズプランを設立。以来、色彩マーケティングを取り入れた販売促進ツールの制作や商品企画、空間トータルコーディネート等の分野で活躍されています。

起業後まもなく、ブライダルをテーマとしたフリーペーパー「ブライド」を発行。「ゼロから営業して広告を協賛していただくことの大変さを知った」と、創刊当時を振り返ります。しかし、苦労をしながらも、その中で築き上げてきた掲載店や読者とのつながりは、「宝物」だと根本さんは言います。そして創刊15周年に「輝業美人」という本を発刊、書店にて販売しました。

(有)ミズプラン
http://msplan.biz

「美癒人」▶
フリーペーパーの発行&
動画サイトで配信中
http://biyujin.com/

ミズプラン設立当時、根本さんはちょうど子育ての真っ最中。「水戸市で0歳児保育が始まった年で、9カ月の息子を保育所に預けました。土日にイベントの仕事がある日には民間の託児所を利用しました。さらに、県外の親に来てもらったこともありました」とのこと。また、放課後に開放学級のある学区へ引っ越ししています。「保育所や、開放学級で見ていただくなど、子育ては県や市の公共機関に助けられました。女性は、結婚や出産、環境などいろいろな状況に左右されますが、多少迷惑をかける部分があっても、仕事を続けていくのが自分らしさかなと思いました。育児や仕事を協働してきた夫のサポートも大きかったですね」と話されます。

ミズプランは、「ブライド」の創刊以来、様々な分野で活躍する女性たちにスポットを当て、紙面で紹介し、女性経営者たちを応援してきました。そして現在は、美しい生き方・自分スタイルの起業やキャリアアップを支援するミズ輝業塾を主催しています。ミズ輝業塾では、起業したい方、また現在の事業をステップアップしたいお店や企業などのコンサルティングから効果的広告宣伝、ブランディングづくりを行っています。

輝き続ける先輩として、チャレンジしたいと願っている女性たちへのメッセージは「等身大が大事だと思うんです。自分もそうでしたが、あまり無理をして高望みすると疲れますよね。やはり、自分ができることから始めていくといいのでは。努力とか頑張っている姿を、必ず、見ていてくれる人がいると思います。一つ一つの目標を積み上げて、最終目標を達成しましょう」ということです。

今後は、美と癒しがテーマのフリーペーパー「美癒人」を媒体に、人との関わりをさらに広げながら発信を続けていきたいと語る根本さんでした。

震災後に立ち上げた
ハートフルブック事業▶
心と心をつなぐ本づくりを
サポート

▲茨城県・女性のための創業支援セミナーにて起業やブランディングづくりのお手伝い

▲緊急人材育成支援事業による職業訓練(基金訓練)の講座風景

Challenge! story 2
団体の取り組み 紹介

娘船頭で水郷潮来ににぎわいを

潮来市商工会青年部

Challenge! 2

飯島部長

「夢は、娘船頭と青年部の部員が結婚して嫁入り舟に乗ってくれることです」

潮来市のある水郷地帯は、昭和の中頃まで水路が道路の代わりで、日常の交通に櫓舟（サッパ舟）を使っていました。この昔ながらの手漕ぎの舟があやめまつり期間中、前川を運行しています。そして、サッパ舟に華を添えているのが、潮来市商工会青年部が運営する「櫓舟保存会」の娘船頭の皆さんです。

昔は、この地の若い娘さんが観光案内を兼ねてサッパ舟を操り、娘船頭として知られたそうです。しかし実際に舟をこぐ若い女性はいなくなってしまいました。そこで、「娘船頭」を言葉だけにしてはいけないと、サッパ舟の伝統を継承する商工会青年部が20年ほど前から育成を始めました。

そして昨年度には、震災後の再生潮来をアピールしようと「頑張れ潮来！娘船頭育成事業」に取り組みました。「この事業で、娘船頭初の公募を行いました。震災後の潮来に、活気とにぎわいを取り戻す原動力として、娘船頭を育成するために実施しました」と、潮来市商工会青年部部長の飯島康弘さん。

現在、娘船頭は7名。育成事業に応募して娘船頭になった須之内絢香さんは、5カ月間毎週土曜日に3時間の練習を重ね、今年デビューを果たしました。「潮来市は商工会も市役所も、皆でまつりを盛り上げようと一生懸命です。まち全体で協力し合ってよい雰囲気なので、そのお手伝いができるのはやりがいがあります」と話していました。同じく育成事業応募者の浅野さくらさんは、あやめまつりをPRする「あやめ娘」出身です。「初めてお客様を乗せたときは、とても緊張しました。商工会青年部の皆さんには、たくさんの時間を割いて教えてもらって、その気持ちや人とのつながりがうれしかったです」とのこと。

「娘船頭さんに、こいでもらえてうれしいと涙して喜んでくれる方もいます。素敵なところだと言われるとうれしいし、潮来のすばらしさを改めて実感しました」と話す草野恵さんは、あやめ娘出身で潮来市職員の娘船頭です。そして、リーダーであやめ娘から娘船頭になった第二号の野口和美さんは、「舟をこぐことで、潮来のPRができればと始めました。商工会青年部との交流もあり、たくさんの出会いがあり、新しい自分とも出会えるので、やりがいがあります」とのこと。娘船頭の活動に誇りとやりがいを感じている、笑顔の素敵な皆さんです。

青年部と娘船頭の活動について、飯島部長は「技術を身につけるのは大変だけど、それを次の世代に伝えていく使命があります。それに何より自分たちが舟をこぐことで、潮来を元気にしたいから活動を続けています」と話していました。「潮来を愛し、潮来を訪れるお客様をおもてなししたい」という気持ちで繋がり、男女で協力して地域に広げています。

青年部集合

青年部の皆さんは普段は潮来市で事業を営み、あやめまつり期間中は櫓舟をこぎます。

Challenge! story 3
事業所の取り組み紹介

女性研究者支援から広がる男女共同参画

……筑波大学 ダイバーシティ推進室

Challenge! 3

ダイバーシティ推進室室長の吉瀬章子教授（右）と常勤の幅崎麻紀子准教授。

筑波大学の男女共同参画の取り組みは、平成9年から始まりました。文系女性教員が中心となり、懇話会を発足。平成10年に男女共生プロジェクトを立ち上げ、平成19年に男女共同参画推進委員会を設置しました。その後、平成20年には「筑波大学男女共同参画の推進に係る基本理念・基本方針」を策定し、具体的な施策を行う男女共同参画推進室が設置されました。そして本年4月に、名称をダイバーシティ推進室に変更しました。

推進室長の吉瀬章子教授によれば、「男女共同参画の本計画を立案した平成21年度の本学の女性研究者の割合は13・9％でしたが、現在は15・8％まで上がってきています。全国平均よりも高いですが、平成32年までには女性研究者の割合が20％程度に達するよう、働きやすい環境づくりを目指しています。実は、こういう取り組みは、女性だけでなく男性も働きやすい社会にしていくことに繋がっているんです」とのこと。

これまでの活動の成果としては、女性研究者の旧姓使用の許可、ハラスメント相談室の設置、保育所の開設などがあります。そして現在も、取り組みは多岐にわたっています。「大学の場合は、組織の中にいても個々人がどれだけ研究をしているかで評価されます。しかし、業績評価に産休を取っていたことを記入する欄がこれまでなく、ただ単に業績が低いとされました。そこで、どういう理由で休暇を取ったかを記入する欄を作ってもらいました。一般の企業なら当然の仕組みが、できていなかったのですね。また、生き物を使って研究するバイオ関係の研究者は、24時間生き物から目が離せないので、休暇や産休を取ると研究を続けられなくなるとの危機感を感じていました。対策として休暇中に研究を補助する人員を、大学の予算から割り当ててもらうようにしました。皆様の要望を聞きながらこのような推進室ならではの支援を、昨年から始めています」と吉瀬さん。

今後の目標は、「支援制度を定着させていくこと」だそうです。「まだまだ、学内の研究者に推進室も施策も浸透していません。ロールモデルが少ないことも問題です。女性が少数な上に、共同して取り組むことがないので、女性が子育てしながら仕事をしているのを見ていないんです。身近にロールモデルがいるのが一番なのですが、そうもいかないので多くの方の参考にと、女性研究者のロールモデル集も発行しています」と話されます。

ダイバーシティ推進室のスタッフの皆さん。

また、ダイバーシティ推進室では、ワークライフバランス相談室「あう」も開設しています。仕事と生活のバランスを取るお手伝いをすることが目的で、専門の相談員が対応します。教職員を対象とした相談室は学内では初めてで、男性の方も相談に来ているということです。さらに推進室では年一回、学長との懇談会を開催し、昨年度は女性研究員のシャワールームの整備、長期履修生制度など、女性研究者のニーズを具体化してきました。「トップの理解がないとできないことですが、学長は大変理解してくださるので私どもの提案が実現しています。女性も男性も大学も、ウィン・ウィン（相互にうまくいくこと）の関係を作るにはどうしたらいいかを考えながら、情報の共有と広報、新しいニーズの発掘を進めていきたい」と、着実にステップを進める吉瀬さんと推進室の皆さんです。

第61号　2012年8月31日発行
発行／茨城県知事公室女性青少年課 〒310-8555 水戸市笠原町978-6 http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/bugai/josei/
制作／株式会社あけぼの印刷社